

序

この本は大学の1, 2年生や専門課程の初年度ではじめて文化人類学を学ぶ学生を対象としている。すべての章は私たちの身近な経験から出発して、さまざまな出来事や制度を人類学的にみるとはどういうことなのかを、できるだけわかりやすく書いている。とはいっても、本書がめざしているのは、文化人類学の基礎的な考え方を伝えることではない。この学問の最新の成果を知らせることであり、その見方を学ぶことで世界がいかに違ってみえてくるかを示すことである。私たちはあなた方のひとりひとりに、文化人類学という学問のおもしろさと価値を伝えたいと思っている。

本書は以下の4つの基本的な認識にもとづいて構成されている。

1. 世界中でグローバル化が猛烈な勢いで進行しており、日本でも世界の他のどの地域でも急速な変化が同時並行的に生じている

本書を編集するふたりがそれぞれ最初の現地調査に行ったのは、1980年代のことである。インターネットや携帯電話などない時代だったから、日本に住む家族や友人とのやりとりは、フィールドの村に週に1度来る郵便に頼るしかなかった。日本と違って各家庭まで配達してくれるわけではないので、村はずれにある郵便局まで歩いて手紙やはがきを受け取りに行くのがとても楽しみだった。スマートフォン（以下、スマホ）でのやりとりに慣れたあなたには想像しにくいかもしれない。連絡手段が他にはなかったから、日本でどんなに大きな事件や出来事があっても、それを知るのには1週間後だった。フィールドにいる私たちと日本とのあい

だには1週間のずれがあったのだ。

ところが今では、どんなに都会から離れた村に行ってもスマホで情報を入手することができる。人類学者の行くフィールドでも、人々は世界中の情報を手に入れているし、やはりスマホを使って送金したり商品を購入したりしているかもしれない。過去には手紙でしか連絡のできなかった人類学者も、帰国後に資料をまとめる段階で疑問があればフィールドの友人に連絡して確認することができるようになってきている。文化人類学という学問の最大の特徴とされてきたフィールドワークのあり方が、これまでとは大きく変わってきているのである。

2. それでも人類学の核心部分は相変わらず、他の人々と直接に 出会う経験としてのフィールドワークであり続ける

テクノロジーの発達によってフィールドワークのあり方が大きく変わったからといって、私たちは文化人類学という学問にとってそれが不要になったとは思わない。むしろ逆に、フィールドに長いあいだ住み込み、食事や生活をともにしながら、対話と観察を続けることで人々の考え方や生き方を学ぼうとするフィールドワークの重要度はさらに増していると考えている。

たとえばスマホで得られる情報のうち、どれがフェイクで、どれが正確な情報なのかを、あなたはある程度は判断できているだろう。そうしたことが可能になるのは、長年の教育や家族や友人との会話等を通じて、あなたに判断や理解のための枠組みができていたためである。こうした判断や理解のための枠組みは、地域や集団や時代によって共通する部分と違う部分とがある。とすれば、自分たちと異なる枠組みを理解するには、私たちが今

まで身につけた殻をいったん脱ぎ捨てて、彼らのものの考え方や判断基準を学んでいくしかない。あなたにも経験があると思うが、初めて出会う人との会話がいかにも気まずく、困難なことか。異質な判断や理解の枠組みをもつ人々との出会いである場合には、その困難はより大きくなる。人類学者は無知の自分をさらけ出しながら相手にぶつかり、彼らの考え方や生き方を学んでいかななくてはならないのであり、本書はそうにして得られた理解にもとづいて書かれたものである。

もっとも、理想とする調査がいつもできるわけではない。とくに21世紀になって、人類学者の調査地では人々がそれぞれに頻繁な移動を繰り返しつつ、スマホなどを使って世界の各地とやりとりをして生活を組み替えていくようなケースが多くなっている。食事や生活をずっとともにしながら調査をすることは、もはや不可能になりつつある。加えて、新型コロナウイルスが出現した昨今では、現地調査はおろか渡航さえもままならない状態になっている。たとえばこの序文を書いている現在も、スカイプやズームなどを使いオンラインで調査地の人々と連絡を取り合う状態が続いている。

しかしながら、どのような事態になろうとも、人類学者は人々の生き方や考え方にできるかぎり近づこうとし、与えられた環境下での最善の方法を人々とともにみいだそうと努めるだろう。スクリーンや音声をとおしてのみ彼らとやりとりを続けることは、従来の基準では十分な接近とはいえない。しかし多くの人類学者は、苦しい境遇を共有しながら何とかあたらしいコミュニケーションを一緒に作り上げることを通じて、彼らの考え方や生き方を学んでいるのである。

3. フィールドワークの根底にあるのは他者と直接的に向かい合うことであり、文化人類学では困難や苦しみを抱えながら生きている人々への関心が大きな位置を占めるようになっていく

文化人類学は書物を通じてではなく、人々と直接に^{あいたい}相対することで彼らについて学ぼうとする学問だから、その彼らのあり方が変化するにつれて、研究関心や方法も変わらざるをえない。人類学がどのように変わってきたかを、ここで簡単に振り返っておこう。

この学問が大学などの研究機関に誕生したのは19世紀後半であった。その当時は、現地調査を柱とするより、文字資料を通じて、人間とは何か、それぞれの社会はどのように違うのかを論じるとどまっていた。やがて他者をいっそう深く精確に理解するために、アフリカやオセアニアの諸地域、あるいはアメリカ先住民のもとへとおもむき、じかに文化や社会について学ぶことが主流となっていった。その時代は世界の大半が少数の国家によって支配されており、人類学は現地の人々に関する知識を提供しながら、植民地支配とともに発展した。しかし、多くの研究者は決して支配の道具になることに甘んじていたわけではなく、自律した学問にするために研究方法を洗練させフィールドワークを通じて他者を理解しようと努めてきたのである。

1980年代まで一般的であったこうしたフィールドワークのあり方——人類学者が遠く離れた調査地で、異なる生活様式を学んでいくという様相——は、21世紀の今日ではすっかり変わってしまった。交通の発達や経済のグローバル化によって世界が一体化し、人々はスマホを手にしてどこでもつながり、ワールドカップの試合に一喜一憂するようにもなった。こうした生活環境の

変化は、1970年代末から世界規模で始まったものである。

1978年に中国が開放政策に転じ、安価な人件費を武器に「世界の工場」と呼ばれるようになった。南と北といういい方をすれば、日本も含む北の工業国は、中国をはじめとする南の国々にきそって工場を移転したので、北の国々でも経済不安と失業が広がっていった。それと並行して、アメリカのレーガン大統領とイギリスのサッチャー首相のもとで「新自由主義」と呼ばれる社会経済政策がとられて、資本や人間の移動の自由化、社会保障の削減、福祉などの公共サービスの民営化が進められた。それまでは、北の豊かな国々と南の貧しい国々という不均衡が存在していたのに対し、北の国々でも貧困と短期雇用が広がったことで、北でも南でも人々はあやうさと不安を抱えながら生きることを余儀なくされるようになったのである。

これと並行して生じたのが、ソ連経済の弱体化とソ連邦の破綻であり、第二次大戦以降続いた東西冷戦の終了であった。これによって世界に平和と繁栄と自由がもたらされるかと思われたが、実際に生じたのはその逆であった。東西対立という枠が外れたことで、資源をめぐる争いや民族紛争、宗教対立などの混乱が世界各地で生じ、戦火や圧政を逃れる避難民や豊かさを求める移民が大量に生まれた。1992年に難民研究に焦点を当てた人類学者のジョン・デービスが、従来の安定的な社会構造や文化形態の研究に加えて、「混乱と絶望に満ちた人類学」、すなわち「苦難の人類学」の必要性を訴えたのは（Davis 1992）、こうした経緯を反映したものであった。

ところがその20年後、工場閉鎖、失業、短期雇用、疾病、戦争、災害といった、人々が直面する苦難をテーマにした「暗い人類学」は、著名な人類学者シェリー・オートナーが指摘するよう

に人類学の一大テーマになっていた (Ortner 2016)。本書の第I部の各章が、貧困、災害、うつ、病気、性的マイノリティといった困難な状況のなかで生きている人々を扱っているのは、こうした近年の傾向を反映しているのである。これらの論文の多くは苦難を抱えた人々への共感を強く示しており、そのことは近年の人類学の傾向の1つとあってよい。とはいえ、人類学者は苦難や困難を抱える他者に感情移入するのではなく、他者に共感する自分を客観化することで、彼らと私たちが置かれている世界の状況とそこに生きる困難とを理解しようと努める。今日の人類学は文化的な差異の理解だけでなく、「傷つきやすい存在としての人間の共通の性質」(Robbins 2013: 450)に強い関心を向けているのである。

4. 世界各地で生じている困難の多くは、社会経済的なだけでなく文化的な問題であり、文化人類学は人々がそれらの問題にどのように対処しているかを知ること、困難の克服に貢献しようと努める

文化人類学は困難や苦難を抱える人々を、主観と客観との往復運動のなかで理解しようとするだけでなく、そうした課題を生み出した世界のあり方を問い直そうとする。そのとき文化人類学は、社会や経済を私たちの外部にある完全に客観的な制度ではなく、つねに私たちが意味を与えることによって機能する主観性を帯びた実在としてとらえる点に特徴がある(このような観点を私たちは文化論的な観点と呼んでいる)。このとき、私たちが与える意味はあまりに慣習化され、自明なものとみなされているので、他者の生活世界を参照したり、他の人々の行動や思考を忠実にたどったり

することで、それを批判的に見直すことが必要だと考えられるのである。

本書の第Ⅱ部は、こうした観点に立つ章によって構成されている。ここでとりあげるのは、アート、人間と動物、食と農、自分、政治といった私たちに身近なテーマだが、実際に論じているのは社会経済的な側面だけでなく、人々の認識や価値判断までを含む複雑な現象であることがわかるだろう。そして、私たちがあたりまえとしている見方や考え方が、じつは世界にたくさんある見方や考え方の1つでしかないことが理解できるようになるだろう。

とはいっても、世界に多様な見方があり、人々がそれに沿って生活を築いていることを理解することが、人類学の最終目的ではない。先にもいったように、人々は多くの困難や苦難に直面しながら、それを乗り越えようとして努力を重ねている。世界には多様な文化、多様な意味の体系が存在するのだから、困難や苦難を乗り越えようとする試みも多様なはずである。そうした人々の試みのなかには、明日を切り開いていく可能性をもつものもあるのではないか。最後の第Ⅲ部では、この観点からさまざまなテーマを議論する。

第Ⅲ部を構成するのは、自由、分配と価値、SNS、エスノグラフィなどの章である。これらは私たちの生活や思考のなかに入り込んでいる現象だが、同時にそこには世界の明日の姿を垣間見せてくれる要素もある。具体的な事例から出発しつつ、そこから可能な未来を想定することは、私たちの生きている現在を批判的に見直すために有効だろう。それもまた、人類学のつとめであり可能性なのである

この本のなかで提示されているさまざまな事例と解釈、構想は、あなたがこれまで親しんできたものとは異なるかもしれない。し

かし、それこそ私たちの望むところである。新しい姿で登場する世界の諸問題に出会うことで、あなた方自身のものの見方や判断のあり方が少しでも変わるように、と私たちは願っている。

本書との出会いが、人類学者の調査のように、あなたにとってのフィールドワークになってほしい。フィールドワークによって他者と自分の見え方が変わり、みえている世界が変容することは珍しくない。世界の見方が変わるなら、それは世界を変える第一歩となりうる。世界にどれだけ難題が山積し、私たちにできることがどれだけかぎられているにしても、この状況を少しずつ一歩ずつでもあらためていく以外に、おそらく進むべき道はないのである。

2020年10月

春日 直樹
竹沢尚一郎

執筆者紹介（執筆順、*は編者）

もりた よしなり
森田 良成

第1章

桃山学院大学国際教養学部准教授

主著：「国境を越えるねずみたちのストリート——ティモール島の密輸における『和解』と『妥協』」関根康正編『ストリート人類学——方法と理論の実践的展開』風響社，2018年，『アナ・ボトル——西ティモールの町と村で生きる』構成協力：市岡康子（映像作品）2012年。

かねたに みわ
金谷 美和

第2章

国際ファッション専門職大学国際ファッション学部准教授

主著：『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版，2007年，「手芸がつくる『つながり』と断絶」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社，2020年。

きたなか じゅんこ
北中 淳子

第3章

慶應義塾大学文学部・社会学研究科教授

主著：『*Depression in Japan: Psychiatric Cures for a Society in Distress*』Princeton University Press, 2012, 『うつ の 医療人類学』日本評論社，2014年。

はまだ あきのり
浜田 明範

第4章

関西大学社会学部准教授

主著：『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐって』風響社，2015年，『再分配のエスノグラフィ——経済・統治・社会的なもの』（編著）悠書館，2019年。

ふかみ きくえ
深海 菊絵

第5章

国立民族学博物館外来研究員

主著：『ポリアモリー——複数の愛を生きる』平凡社，2015年。

かねまつ めい
兼松 芽永

第6章

国立民族学博物館共同研究員

主著：「アートプロジェクトをめぐる協働のかたち——地域活動と大地の芸術祭サポート活動のあいだ」白川昌生・杉田敦編『芸術と労働』水声社，2018年，「アートプロジェクトの図地転換——田んぼの『棚田化／アート化』から考える」『国立民族学博物館研究報告』45（2），2020年。

おくの かつみ
奥野 克巳

第7章

立教大学異文化コミュニケーション学部教授

主著：『ありがとうもごめんない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』亜紀書房，2018年，『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』亜紀書房，2020年。

も さ
MOSA

第7章

マンガ家

主著：『マンガ人類学講義 ボルネオの森の民には、なぜ感謝も反省も所有もないのか』（共著）日本実業出版社，2020年

たけざわ しょういちろう
* 竹沢 尚一郎

第8章

国立民族学博物館名誉教授

主著：『人類学的思考の歴史』世界思想社，2007年，『社会学のエッセンス〔新版補訂版〕』（共著）有斐閣，2017年。

かすが なおき
* 春日 直樹

第9章

大阪大学名誉教授・一橋大学名誉教授

主著：『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』（編著）世界思想社，2011年，『科学と文化をつなぐ——アナロジーという思考様式』（編著）東京大学出版会，2016年。

まつだ もとじ
松田 素二

第10章

京都大学大学院文学研究科教員

主著：『*African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions*』（共編著），LANGAA，2017，『*The Challenge of African Potentials: Conviviality, Informality and Futurity*』（共編著），LANGAA，2020。

なかがわ おさむ
中川 理

第11章

立教大学異文化コミュニケーション学部准教授

主著：『文化人類学の思考法』（共編著）世界思想社，2019年，『移動する人々——多様性から考える』（共編著）晃洋書房，2019年。

にし まこと
西 真如

第12章

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特定准教授

主著：「無力な死者と厄介な生者——エチオピアの葬儀講活動にみる保険・信頼・関与」東賢太郎ほか編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』世界思想社，2014年，「あの虹の向こう——大阪市西成区の単身高齢者と世代・セクシャリティ・介護」森明子編『ケアが生まれる場——他者とともに生きる社会のために』ナカニシヤ出版，2019年。

くほ あきのり
久保 明教

第 13 章

一橋大学社会学研究科准教授

主著：『機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ』講談社，2018
年，『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から
存在様態探求へ』月曜社，2019 年。

おがわ さやか
小川 さやか

第 14 章

立命館大学先端総合学術研究科教授

主著：『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチンガ
の民族誌』世界思想社，2011 年，『チョンキンマンションのボスは知
っている——アングラ経済の人類学』春秋社，2019 年。

第Ⅰ部 傷つきやすいものとしての人間

第1章 貧 困 3

- 1 貧困への恐怖4
 「いつか自分もこうなるかも」 4 「きっと自分はこうは
 ならない」 6
- 2 2つの貧困8
 どちらがまだ「まし」なのか 8 貧困の「違い」 9
- 3 お金と人生12
 「ただお金だけがない」 12 貧困と社会的排除 14
- 4 貧困の多様さと、そこからの自由のあり方18

第2章 自然災害 23

被災地における手仕事支援の意義

- 1 自然災害の被災地をフィールドにする24
 インドの被災地 25 手仕事を介した支援 26 手仕
 事は生活を支える仕事になった 27
- 2 日本が被災地になった30
 日本でも手仕事を介した支援がひろがった 30 仮設住
 宅の集会所で手仕事をする 31 インドとは異なる点
 34
- 3 経済的自立と支援の意味35
 ささやかな収入でも意味がある 35 手仕事によって、
 辛い時をやり過ごすことができた 36

第3章 う つ 43

- 1 新健康主義：心のスクリーニング44
- 2 心の病はどうとらえられてきたか46
伝統的災厄論 46 20世紀の日本におけるうつ病 48
バイオロジカルな災厄論：グローバル化する21世紀のうつ病 50 日本のうつ病 53
- 3 心と脳の監視社会？55

第4章 感 染 症 61

- 1 数字と人生62
数百万人のうちの1人 62 感染症とともに生きる人々の苦しみと力 63 環境の一部としての数字 67
- 2 多様なバイオソーシャルリティ69
市民であることの前提としての生物学的なもの 69 政策のなかの生物学的なもの 70 臨床と疫学 72 バイオソーシャルな世界を生きる 75

第5章 性 愛 79

他者と向き合う

- 1 他者との遭遇80
私の「愛」とあなたの「愛」 80 愛する人は他者 81
モノガミー 82 「奇妙」な関係 82 ポリアモリーとは？ 83 ポリアモリーに至る背景 85 意識的な関係構築：感情管理を中心に 87
- 2 「厄介な」他者89
「夢中になる」ことの両義性 89 性愛における暴力 90
愛撫 91

3 他者への接近	93
性愛と他者 93	他者と向き合う 93

第II部 文化批判としての人類学

第6章 アート 99

1 開かれゆくアートとイメージの拡張	100
なにが「アート」にするのか? 100	開かれていくアート 102
加速するイメージの拡張 103	
2 フィクションと現実の相互生成	105
社会モデルとしてのアート? 105	新しいお祭りをつくる 107
還るところ 109	アートの道具化 112
不可避な「距離」がもたらすもの 113	
3 複数の現実を照らし返すイメージ	113
100年を架ける大風 113	消えゆくイメージと現実の複数性 115

第7章 人間と動物 巻末

第8章 食と農 119

1 なぜ日本の有機農業は少ないのか	120
2種類の食パン 120	農薬の危険 120
有機農業教室の教え 121	有機農業の割合 122
農業の多面的機能 124	
2 農業による環境保全	125
豊かな農業を維持する仕組み 125	コウノトリを育む農業 127
農業者の誇り 128	アフリカの農業と「緑

の革命」の功罪 129

- 3 グルメブームとスローフード132
マクドナルドとスローフード 132 グルメブームの陰で
133 食べることは私たちの内なる自然を再確認すること
134

第9章 自分

- 1 誰もが自分ネイティブ138
- 2 自閉スペクトラム症と診断される人々139
ずっと「普通」になりたかった 139 欠陥か才能か
141 自他の思考と感情 142 生き方の模索 143
- 3 霊とともに生きる人々145
生者の魂、死後の霊 145 霊力をそなえた自分 146
霊力への配慮 148
- 4 2つの人々が共有するもの149
彼らにはあり、私たちにはない 149 気持ちも感情も
150
- 5 知覚できないもの152

第10章 政治

- 1 集団の意思を決定する方法158
政治とは何だろう 158 他者（違い）と向き合う作法
159 多数決：意思決定の常識 160 全員一致：もう1
つの方法 161
- 2 アフリカ社会の合意形成の知恵163
雄弁術 163 パラヴァー：「全員一致」の知恵 166
- 3 社会の分裂と破局を乗り越える方法168
破局的対立：ルワンダのジェノサイド 168 ジェノサイ
ド問題の解決法 170 ガチャチャとパラヴァー 171

4 「文化人類学する」ことの醍醐味	173
-------------------------	-----

第Ⅲ部 人類学が構想する未来

第11章 自由	179
----------------	-----

1 自由のとらえ方	180
とらえどころのない自由 180	解放としての自由 181
結びつきがつくる自由 182	
2 忘却と自由	185
結びつきの忘却 185	忘れないなら不自由? 187
3 もう1つの自由	189
遠くの自由 189	ケアと自由 193
4 身近な自由をとらえなおす	195

第12章 分配と価値	199
-------------------	-----

1 権原とシチズンシップ	200	
治療のシチズンシップ 201	正当な分け前 203	豊かさ
かが雇用に結びつかない世界 205		
2 新しい分配の政治	206	
就労や家族制と切り離された給付 207	人々を選別する装置 208	ベーシック・インカムの可能性 209
3 家父長制が終わった世界を生きる	210	
家父長制の揺らぎ 211	父親の不在 212	ケアの関係から疎外されていること 213
人はなんで生きるか 215		

第13章 S N S	219
-------------------	-----

1	それは何か？	220
	仮想空間の解体	221
2	仮想と現実	222
	変容と矛盾	223
	矛盾の乗り越え	224
3	記号と情報	225
	人称と非人称	226
	誰のものかわからない発話	228
4	半人称的発話	230
	コンテクストの分裂	230
	SNSへ	231
	多様性と標準化	235

第14章 エスノグラフィ 239

1	新たなエスノグラフィの兆し	240
	新型コロナ禍のなかで	240
	リモート・エスノグラフィの兆し	242
2	エスノグラフィをめぐる問いとICT	246
	『文化を書く』が投げかけた問いとICT	246
	方法としてのエスノグラフィにおけるコラボレーション	249
3	ICTが切り開く新たなエスノグラフィ	251
	ハイパーメディア・エスノグラフィ	251
	プロトタイプ駆動	254

引用文献一覧 259

事項索引 266

人名索引 272

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第4章

感染症



(時事通信フォト提供)

かつて人類の深刻な脅威と考えられていた天然痘は、1980年までに地球上から根絶されている。その一方で、21世紀に入ってから新たな感染症が繰り返し流行してきている。私たちの生活に大きな影響を与える感染症の流行は、単純に病原体の生物学的な特徴によってのみ決まるのではなく、それに感染する人間の状況にも大きく依存している。本章では、2020年の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック下における日本の状況を念頭に、文化人類学が感染症と感染症対策についてどのように検討してきたのかを説明していこう。

1 数字と人生

数百万人のうちの1人

2019年12月に中華人民共和国の武漢で確認された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は世界的な感染拡大を引き起こし、2020年9月15日現在、感染者は全世界で2915万5581人、死者は92万6544人にのぼっている(WHO発表)。日本でも、感染拡大が本格化した2020年3月以降、感染者数に関する報道が連日なされるようになった。感染症対策の専門家たちも、そのような数字を用いながら感染拡大がどれくらいの速さで進むのかを算出し、どのような対策をとればそのペースを抑えられるのかを複雑な計算によって求め、政策を決定する際の科学的な根拠として提示している。私たちは、COVID-19を引き起こすウイルスの姿を肉眼で確認することはできない。それどころか、誰が感染しているのかを目で見て判断することもできない。COVID-19という病気の存在は、日に日に増大する感染者数やその推移予測を示すグラフの形で私たちの目の前に現れている。

特定の存在について、それがどれだけ多くの人間に影響を与えたのかによって語ることはそれほど珍しいことではない。たとえば、このゲームソフトは400万本売れたとか、この映画は累計で210万人の観客を動員したというような話はパンデミック(世界的流行)の以前から日常的に聞くことができた。感染症の特徴は、単に人間を数百万人のうちの1人として扱うのではなく、同時に、1人ひとりの感染者にも注意をひく点にある。

21世紀に入ってから流行したさまざまな感染症への対策にお

いて、感染者が誰と接触したのかを追跡する手法は一般的なものとなっている。感染している可能性のある接触者を追跡し、発症する前から監視しておくことで、その人が仮に発症したとしてもほかの人に感染させるのを防ぐというのである。2002年に発生した重症急性呼吸器症候群（SARS）を抑え込む際にも、2014年に西アフリカで大規模な感染拡大を引き起こしたエボラ熱への対応においても、この方法は大きな成果をあげてきた。COVID-19の流行に際して、「クラスター班」と呼ばれる日本の感染症対策の専門家たちが採用している方法の主要な柱の1つもこれである。感染者の過去の行動をさかのぼることで感染者と接触した人を監視していく方法では、1人ひとりの人間は数百万人のうちの1人としてではなく、特定の時間に特定の場所を動き回る個別性をもった具体的な個人として扱われることになる。

とはいえ、そこで注目されるのは、あくまでも感染拡大と関係する限定された期間についての、つまり数日からせいぜい数週間の中の個々人の行動にすぎない。COVID-19に感染した数千万人の人々のそれぞれが、どのような顔でどのような仕事をしており、どのような家族とともにどのような環境で生活しているのかについて、私たちはほとんど知ることはない。

**感染症とともに生きる
人々の苦しみと力**

とはいえ、感染症とともに生きる人々の1人ひとりに焦点を当てることは、それほど珍しいわけではない。報道番組を注意深く見ている人は、何人かの英雄的な感染者の存在を知っているかもしれない。たとえば、COVID-19の流行の初期段階に危険な感染症の流行の兆しがあることに警鐘を鳴らした武漢の眼科医である李文亮（誤った噂を流したとされて警察の捜査を受けた後、

自らも感染して命を落とした)や、2003年3月にベトナムのハノイでSARSの治療にあたったイタリア人医師カルロ・ウルバニがその後の感染拡大の防止に重大な貢献を果たしたこと(そして、そのさなかに自らも感染して命を落としたこと)はよく知られている。報道番組や新聞のほかにも、闘病記や裁判記録、小説などさまざまなメディアが、感染症とともに生きる人々の人生を綴ってきた。そこで描かれてきた人々の多くは、必ずしも李文亮やウルバニのような悲劇的な英雄だけではない。

無名の患者たちの生について語る際には、いくつかの様式や目的が存在しうる。たとえば、ウガンダのHIV感染症とともに生きる人々について調査をしているスーザン・ホワイトたちは、2000年代初頭に抗HIV薬治療の援助を受けた人々が、自らの経験や状況について雄弁に語っていることを報告している。そうすることで、自分を支援してくれたNGOの重要性をアピールすることができ、看護学校における臨時講師や海外での講演のチャンスを得ることもある。感染症とともに生きるという独特の経験について語ることで、人々は、自らのパトロンである団体により多くの支援を呼び込むことができ、自らもHIV感染症の専門家としての立ち位置を確保できるようになるというのである(Whyte et al. 2013)。

ここで注目すべきなのは、自らの生について語ることが打算に基づいているということではない。打算はほとんどあらゆる場面に見出すことができるので、何らかの行為の背景にそれがあることを指摘しても、ほとんど何も言っていないのに等しい。むしろ、ここで強調されるべきなのは、感染症とともに生きる人々にとって、自らの生について語ることはある種の資源として自分や他人のために活用できるものであり、また、他の人々の行為を誘発す

るものでもあるということである。感染症とともに生きる人々は単なる被害者ではなく、彼ら・彼女らと周囲の人々の生活を変容させる力も持っているのである。

感染症とともに生きる当事者の人々とは異なり、文化人類学者が1人ひとりの感染者に焦点を当てる際には、感染症とともに生きる人々の苦しみに政治経済的な不平等や植民地主義といった負の歴史が色濃く刻印されていることも強調されてきた。つまり、人々の苦しみは必ずしも個人的なものではなく、生きられた時代や場所に依じて、ある程度の共通性をもっているのである。文化人類学者たちは、個々人に注目することで、そのような共通性を生み出す構造を明らかにするとともに、人々がそのような構造のなかでどのように創造的に生を紡いできたのかを明らかにしてきた。

たとえば、西真如は、エチオピアの HIV 陽性者運動で活動するマサラトという女性の人生を通して、国際的な HIV 対策と HIV 陽性者運動の変遷が具体的な個々人の人生にどのような影響を与えてきたのかを描き出している。西によれば、エチオピアの HIV 感染症とともに生きる人々は、2000 年代に国際的な陽性者運動と接続することで、抗 HIV 薬の提供を受けられるようになった。この背景には、すべての HIV 陽性者に抗 HIV 薬を提供することでもっとも効果的かつ効率的に感染症の流行を収束させるという世界的な政策の導入がある。この政策においては、HIV 対策の正否はもっぱら抗 HIV 薬を定期的に服用する人の割合などの数字に基づいて判断される。そのため、HIV 感染症とともに生きる人々は、個々人が HIV に感染していることを超えて経験している苦しみについては、むしろ放置されるようになった。そのようななか、マサラトは自らの経験を語ることで国際的

なネットワークに接続するというよりは、現地に留まらざるをえない人たちをケアする活動に従事することで、ホワイトたちが描く雄弁な人々とは異なる形で、自らと周囲の人々の生活を変える力を発揮しているという（西 2017）。

同様に、デボラ・ジニスは、2015年にブラジルで流行したジカ熱に感染した母親たちと治療に当たった臨床医に注目することで、ブラジルにおける女性の立場の弱さやブラジル国内の南北問題に光を当てている。ジカ熱は、COVID-19のように多くの人の命を奪う病気ではない。ただし、感染者が妊娠していた場合、容易に看過できない結果をもたらす。胎児の発達に影響を与え、小頭症と呼ばれる奇形を引き起こすのである。ジニスは、ブラジルのなかで比較的貧しい地域である北東部で暮らすジカ熱の影響を受けた女性たちの苦しみを丹念に描き出す。同時に、流行の初期に未知の感染症がジカ熱であることが突き止められ、感染した妊婦から生まれた子どもが小頭症を発症する可能性について明らかになっていく際に、世界的に名をはせた南部の研究機関の科学者だけでなく、北部の臨床医や母親たちが重要な役割を果たしたことも指摘している（ジニス 2019）。

これらの事例からは、人々の苦しみは感染症によってのみ引き起こされているのではなく、感染症になりやすく回復しづらい状況に追いこんでいくような構造によっても苦しめられていること、そのなかでも人々は構造のあり方を変容させるような力を発揮してきたことがわかる。このような感染症の姿は、感染者や死者の数やその推移で可視化されているものとは異なるものであり、数字を追っているだけでは見えてこないものでもある。

環境の一部としての数字

とはいえ、数字がまったくの無意味というわけではない。むしろ、数字によって表される感染症の特徴は、政治経済的な構造と組み合わせりながら、人々の経験にある程度の共通性を生み出す環境の一部を形成している。感染症の流行やそのなかでの人々の経験を理解するためには、数字で表される生物学的な領域バイオロジカルと政治経済的な構造やマイクロ人間関係に代表される社会的な領域ソーシャルの絡まり合いに目を向ける、バイオソーシャルなアプローチをとる必要がある。

たとえば、エボラ熱は、記録に残っている限りでは1976年に発見されているのにもかかわらず、有効な治療薬やワクチンが開発されないまま、2014年に西アフリカで大規模な流行を引き起こした。その後、治療薬やワクチンの開発が急ピッチで進められ、2019年までには一定の有効性をもつ治療薬とワクチンが利用可能になっている。有効な対策が準備されなかった38年間と、治療法と予防法に目途がつくまでの5年間という長さの違いは印象的である。もっと早く開発に着手していれば、多くの人の命を救えたかもしれない。

このようなエボラ熱への対策の歴史的経緯にも、数字が大きな影響を与えている。2014年に西アフリカでアウトブレイク（集団発生）が起きるまで、全世界で確認されたエボラ熱の感染者数は2410人、死者数は1594人であった。感染者の50～70%が短期間に死亡するエボラ熱は、感染が拡大する前に感染した人間を殺しつくすため、大規模なアウトブレイクを起こしていなかったのである。治療法や予防法の開発には多くの資金と労力が必要になる。どれほど危険な病気であったとしても累計の患者数が数千人であればコストに見あう利益を得ることはできない。感染者に対

しては残酷な計算ではあるが、数字に基づく計算は感染症の危険性と感染することの経験に大きな影響を与えることがよくわかる。

COVID-19のパンデミックも、数字で表される感染症の特徴が人々の経験を枠づける環境の一部となりうることを理解するための格好の材料を提供してくれる。COVID-19の特徴は、感染者の致死率や重症化率が際立って高いわけではないものの、短期間に多くの人に感染することにある。そのため、医療体制が対応できる能力を超えた重症患者が発生し、適切な医療を受けることができないまま亡くなる感染者が多数現れるのである。まさに数字の推移が感染者の予後や経験に大きな影響を与えており、また、数字の状況から感染症に対するこれまでの備えが政策的に十分なものであったかどうかが判定される状況にある。さらに、COVID-19の感染者数の推移は、まだ感染していないけれども感染する可能性のある人々の日常生活のあり方にも大きな影響を与えている。強い感染力をもつ病気に対しては、感染する以前から予防のための措置をとらざるをえないからである。

このように見てみると、数字として表れる感染症の特徴と1人ひとりが経験する感染症の特徴は、対立的というよりはお互いがお互いを含みこみあう、相互包含的な関係（モル 2016）にあることがわかる。1人ひとりの経験の累積が数として把握される一方で、数として表れる感染症の特徴が1人ひとりの経験の重要な一部を構成しているのである。改めて、感染症について理解するためには、数字で把握される病原体の^{バイオロジカル}生物学的な特徴だけを見ても、政治経済的な構造、感染症に対する備え、人間のふるまいといった^{ソーシャル}社会的な状況だけを見ても十分ではなく、両者の絡み合いに注目するバイオソーシャルな視点が不可欠なのである。

2 多様なバイオソーシャルリティ

それでは、このバイオソーシャルという視点を導入することで、どのようなことが明らかになるのだろうか。その可能性のすべてを挙げることはできないが、代表的なトピックである生物学的ステータスと市民であることとの関係、感染症対策を駆動する生物学的なもの、臨床と疫学の関係について、以下、説明していこう。

市民であることの前提としての生物学的なもの

人間の生活がバイオソーシャルなものであることを描き出した文化人類学者に、チェルノブイリ原発事故後の生活を描いたアドリアナ・ペトリーナがいる。ペトリーナは、独立後のウクライナにおいて、チェルノブイリ原発事故によって被曝したという生物学的なステータスが、むしろ、市民権が保障されるための条件になってきたことを指摘している。

ペトリーナによると、チェルノブイリ原発事故の直後にソ連が治療と補償に注力したのは237人にすぎなかったが、独立後にウクライナ政府が認定した被曝者数は350万人にのぼる。この数字の大きな乖離の背景には、科学が確定的なことがいえないなかで、特定の生物学的なステータスの認定に、科学的な手続きだけでなく、政治的な要素が入り込んでいることがある。同時に、ウクライナ政府が経済的な理由からすべての国民に社会的な保護を与えることができない状況にあって、原発事故の被災者やそれよりもさらに重篤な影響を受けているとされる障害者と認定された者だけが、経済的に生存を保障される市民として扱われているという。

つまり、被曝によるダメージという否定的な生物学的ステータスが、政治的な権利の基盤となっているのである。ペトリーナは、さらに、このような生物学的ステータスを手に入れるためには、インフォーマルな取引や融通のシステムを活用する必要があることも指摘している。ここでは、国家レベルでの政治だけでなく、よりミクロな場面での政治をも含みこんでいる生物学的なステータスが、人々の生活のあり方に大きな影響を与えているという、生物学的なもの和社会的なものが複雑に絡み合った状況が見て取れる（ペトリーナ 2016）。

ペトリーナが焦点を当てる放射能に被曝した人々は、感染症に罹患しているわけではない。しかし、生物学的なステータスが、その人の生活の基盤の一部をなしているという点については、ホワイトたちや西が描き出す HIV 感染症とともに生きる人々と共通している。東アフリカにおける HIV 感染症とともに生きる人々も、HIV に感染しているということによって、経済的な支援を受けたり、学校や NGO で職を得たり、海外に渡航するチャンスを得てきたからである（Whyte et al. 2013；西 2017）。

政策のなかの生物学的なもの

それでは、放射能に被曝したことと感染症に罹患していることの違いはどこにあるのだろうか。大きな違いの1つは、感染症は文字どおり感染性であるために、病気にかかっていることが本人の健康だけでなく、周囲の人の健康にも大きな影響を与える点にある。放射能に被曝していることは本人にとっては重大な問題であるが、その人がほかの人の健康に直接的に影響を与えることはない。

このような感染症の生物学的な特徴は、たとえば、HIV 感染

症対策における「予防としての治療」という政策の前提をなしている。「予防としての治療」とは、全世界ですべての HIV 陽性者に治療薬を提供することにより HIV 感染症の流行を収束させようというものであり、この政策の効果と効率のよさ（安上がりであること）は、疫学的数理モデルによって立証されているという（西 2017）。ここでは誰かの症状の進行を遅らせる臨床的な営みが、ほかの誰かの感染を予防する公衆衛生的な営みと一致するという状況が見て取れるのである。

この予防と治療の一致は、他の感染症への対策にも見て取れる。たとえば、2015 年にノーベル医学生理学賞を大村智にもたらしたイベルメクチンは、河川盲目症という感染症に効果があるとされ、この病気の感染拡大を防ぐために年間延べおよそ 4 億人に配布されている。河川盲目症は、ブユが媒介する回旋糸状虫という寄生虫に感染することによって発症する。この回旋糸状虫の成体の寿命は 8 年から 15 年とされ、毎年数千の仔体（ミクロフィラリア）を排出する。イベルメクチンは成体を殺すことはできないが、何らかの形で仔体を無力化し、成体の仔体生産能力を数カ月にとたって著しく減退させる。仔体に対する強力な効果によって、イベルメクチンは失明などの病状の進行を遅らせ、また、周囲の人への感染リスクも減らすことができるという（ホッテズ 2015）。

ここでも、抗 HIV 薬と同じように、イベルメクチンは感染者の症状の進行を遅らせると同時に、他の人への感染力を弱めるために予防的な手段としても利用されている。他方で、この薬の使用のされ方には、抗 HIV 薬とは異なる部分もある。イベルメクチンは、感染が確認された人だけではなく、河川盲目症が確認されている地域に住むすべての人々に対し投与されている。再び数理モデルによると、地域の住民の 65% 以上が 16–18 年にわたっ

てイベルメクチンを年1回服用することで、その地域から河川盲目症を排除することが可能になるとされる（WHO n. d.）。イベルメクチンが、年間4億人に配布されているということは、地球上に4億人の感染者がいることを意味してはいないのである。

ただし、感染症を治療することと感染拡大を防ぐことが、同一の手段によって達成されるのは、必ずしもすべての感染症について妥当するわけではない。COVID-19のパンデミックにおいては、感染しても症状のない者や軽症の者が多く、逆説的にこのことによって、無症状者や軽症者からの感染拡大が大規模な流行の原因になったとされる。このような状況では、感染者に対する治療が必ずしも公衆衛生的な予防に大きな効果をもたらすわけではない。通常、政治や社会の領域にあると考えられがちな感染症対策のあり方や効果にも、前項で取り上げた感染者の生活がそうであったように、感染症の生物学的な特徴が織り込まれているのである。

臨床と疫学

それでは、COVID-19への対応には、これまでの感染症対策との共通点はないのであろうか。そうではない。本章の冒頭で述べたように、感染者の接触者を過去にさかのぼって追跡する方法は、これまでも用いられていた。もう1つ、共通点として指摘できるのが、臨床的な対応が科学的事実をつくりだすプロセスともなっているという点である。

再び、河川盲目症に対するイベルメクチンの配布について見てみよう。イベルメクチンを配布する目的は、河川盲目症の感染者の症状の進行を遅らせ、同時に、ほかの人への感染拡大を防ぐことにあった。この目的を達成するためには、河川盲目症に感染し

ているかどうかにかかわらず、住民の 65% に継続的にイベルメクチンを服用させ続ける必要がある。

私自身が調査を行った西アフリカのガーナ南部においては、この作業はボランティアによって実施されていた。人口の 65% がイベルメクチンを服用しているかどうかを確認するためには、当該地域の人口が何人でありそのうち何人の人が服薬しているのかを確認する必要がある。そのためボランティアたちは、世帯ごとの服用状況を記載するための専用のフォームが印刷されたノートを持ち歩き、いつ、誰が、何錠のイベルメクチンを服用したのかの記録をつけていくことになる。この際、注目に値するのは、副反応の有無についても記録することが求められている点である。河川盲目症の感染者がイベルメクチンを服用したとき、肌の表面に蓄積した仔体が暴れまわることで強烈なかゆみをもよおす。この副反応を確認することで、誰が河川盲目症に感染しているのかを確認することができ、その記録を集めることで当該地域の有病率を知ることができるのである。

こうしてボランティアたちは、イベルメクチンを配布しながら記録をつけることによって、当該地域のイベルメクチンの配布率と河川盲目症の有病率を計算するためのデータを収集している。しかし、ボランティアたちの関心は、正確な記録をつけることというよりは、治療と予防のために薬剤を多くの人に配布することのほうにあるので、集められたデータは正確とは言い難い。にもかかわらず、そのデータは、河川盲目症対策が成功しているかどうかを判断するための科学的事実として活用されている（浜田 2017）。

COVID-19 のパンデミックに際して、日本で大きな議論を巻き起こしたのは、感染を確認するための PCR 検査の数が十分な

のかどうかという点であった。他の国と比べて比較的検査数が少なかったことの背景に、日本政府が感染対策を実際よりもうまく見せかけるために、政治的な関心に基づいて検査数を絞っているのではないかと疑われたのである。実際にどの程度の検査を行うべきなのかについては、そのときどきの感染状況や検査体制といった社会的な要因によっても左右されるので、純粋に科学的な知見によって決まるわけではない。感染症専門家の間でも意見が分かれたり、時間的経過とともに認識が変化したりしている。しかし、一点だけ強調しておきたいのは、日本のCOVID-19への対応におけるPCR検査の実施方針は、あくまでも臨床的な目的、すなわち感染者をどのように治療するのかという観点から策定されたものであって、日本全国のすべての感染者を正確に数え上げることを目的としていたわけではないということである。

先に紹介したように、チェルノブイリ原発事故の事例では、ソ連とウクライナの被曝者の認定数の違いは、科学的に確かなことがわからない状況で政治的な要素が入り込むことによって生まれていたと指摘されている（ペトリーナ 2016）。それに対して、COVID-19の感染者数に関する認識の違いは、科学に政治が入り込んだ結果というよりは、いずれも科学的と言いうる、臨床的な方法と疫学的な方法の差異を反映したものである。

臨床的な目的のための検査によって数えられた数字と、感染者数を正確に把握するための検査によって数えられた数字の違いに注目することからは、文化人類学におけるもう1つの数字の取り扱い方が見えてくる。前節で述べたように、文化人類学者は、感染者の数よりも1人ひとりの人生に注目する傾向が強いが、数字と人生はお互いがお互いを含みこむ相互包含的なものであった。

それに加えて、文化人類学者は、すでに数えられた数字を用いて何らかの計算をするのではなく、誰がどのような手段を用いてその数字をつくったのかというプロセスに注目していく（モル 2016）。数字がつくられたプロセスを視野に入れて考えるならば、そもそも、数字自体が純粹に生物学的なものではなく、社会的なものを含みこんだ、バイオソーシャルなものなのである。

バイオソーシャルな世界を生きる

本章では、2020年のCOVID-19のパンデミックとそれに対する日本の状況を念頭に、感染症について文化人類学で考えることがどのようなことであるのかについて解説してきた。文化人類学は、感染症とともにある人々の生活とそれを梃づける政治経済的な構造、感染者の数と1人ひとりの経験、生物学的なことがらと社会的なことがらといった、対立的にとらえられがちな領域を横断しながら検討することによって、感染症と人間が相互に影響を与えながら共同で作り出す世界のありようを明らかにしようと試みてきた。その過程で明らかになったのは、市民や政策といった社会的なものに生物学的なことがらが含まれており、数字で表されるウイルスの特徴に社会的なものが含まれているということであった。

とりわけ2000年代以降に発展してきたこれらの議論は、国家や科学と人々の関係についても従来のとらえ方からの変更を迫っている。1970年代以降、文化人類学者は、他の人文社会系の諸分野と歩調を合わせながら、医療が人々の生活に与える影響の大きさを強調し、国家や資本と医療が共犯関係にあることを指摘することで、医療を支配のための道具として批判的に言及してきた（たとえば、Taussig 1980）。2020年のCOVID-19のパンデミック

に際して、感染症専門家の助言に基づいて人々の行動が規制されることへの懸念がさまざまな形で表明されているが、それらの発言の多くは、医学的な目的を達成するために個々人の自由が抑圧されることを批判するものであり、文化人類学の古典的な議論と基本的に同じ枠組みのなかに留まっている。

しかし、医療を支配の道具としてのみとらえ、それに対して自由を擁護することに拘泥し続けることには注意が必要である。これまで述べてきたように、また、COVID-19の流行があらわにしたように、私たちの生活は感染症やそれへの対応によっても大きな影響を受けている。たとえば、差別や格差といった人間同士の関係によってつくられる問題について考える際には、「誰」の言うことを聞くべきなのか、「誰」の支配を誰が受けているのかという支配-自由という軸に沿って議論していくことは依然として重要であろう。他方で、病気や感染症、気候変動のように、人間以外のものを含めた世界のなかで発生している問題について考える際には、私たちの実践によって「何」が達成されるのかのほうに重点が置かれざるをえない（モル 2016）。自由を求める人々の実践によって大規模な感染拡大が引き起こされることは、誰もが望んでいないことだからだ。感染症の存在を含みこんだ生活について検討するためには、支配-自由というこれまで常に重視されていた軸とは異なる、新しい軸が必要になってくる。

オランダの文化人類学者アネマリー・モルは、そのようなバイオソーシャルな世界を理解するための軸として、「ケア-ネグレクト」という軸を提案している。医療や科学技術を抵抗すべき敵としてではなく同じ目的を達成するためのチームの一員ととらえ、また、一時的な選択を行う代わりにつねに新しい状況に対応していくケアの実践を擁護するモルの議論は、現状の分析や批判に留

● 編者紹介

春日直樹 (かすが なおき)

大阪大学名誉教授・一橋大学名誉教授

竹沢尚一郎 (たけざわ しょういちろう)

国立民族学博物館名誉教授

ぶんかじんるいがく
文化人類学のエッセンス
——世界をみる／変える

The Essentials of Cultural Anthropology



有斐閣アルマ

2021年1月20日 初版第1刷発行

編者 春日直樹
竹沢尚一郎
発行者 江草貞治
発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
電話 (03)3264-1315〔編集〕
(03)3265-6811〔営業〕
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・複製本印刷株式会社

© 2021, Naoki Kasuga, Shoichiro Takezawa. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-22169-7

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。